〈1〉こども食堂　―様々な子どもたちとの関わりで見えてきたこと―

一般社団法人栃木県若年者支援機構
キッズハウス・いろどり責任者　荻野 友香里

1　はじめに

最初のこども食堂が誕生してから，2022年でちょうど10年を迎える。宇都宮市では2016年に，最初のこども食堂が昭和地区にオープンした。現在，宇都宮市内には10箇所，県内全体では56箇所こども食堂がある。そして全国には6,014箇所あると発表された（図１）。

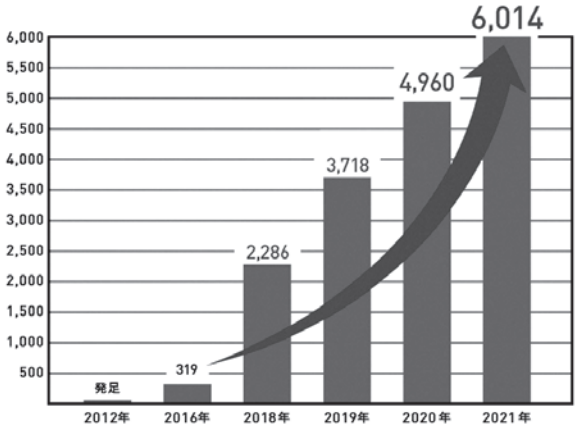

図１　こども食堂全国箇所数

ＮＰＯ法人全国こども食堂支援センターむすびえホームページ[1]

順調にこども食堂の数は増えているが，全国的には子どもが一人で歩いて行けるところにこども食堂がある状態，つまり小学校区に1つこども食堂があることを目指しており，その充足率100％を達成したい目標として掲げている。

現状では栃木県の充足率は13.47％と全国では40番目と低いが，こども食堂を運営する方々は，コロナ禍でも子どもたちに食を届けようと模索し活動し続けている。どのこども食堂も，子どもを想う温かい大人たちで溢れている。

東京都大田区にある気まぐれ八百屋だんだんこども食堂の近藤氏は「子どもが一人でも行ける無料または定額の食堂」をこども食堂と名付けた。そこに貧困の子ども，子どもしか利用できない，などの言葉はない。しかしながら，そのようなイメージを持つ人は多い。

ここでは，実際にこども食堂を開設し，運営している者として，子どもの貧困問題や見えてきた子どもたちを取り巻く現状，さらに少しずつ変わり始めている社会の動きについて述べたい。

2　日本の子どもの貧困問題

(1) 相対的貧困の概念

「この地域に貧困の子どもはいない」という言葉をよく耳にする。この場合の“貧困の子ども”のイメージは人によって違うかもしれない。

「子どもの貧困」の著者である阿部彩（東京都立大学教授）によると，人々が生活するために必要なものは，食料や医療など，その社会全体の生活レベルに関係なく決められるものであるとする絶対的貧困に対し，相対的貧困とは，人々がある社会の中で生活するためには，その社会の「通常」のレベルから一定距離以内の生活レベルが必要であり，それ以下の生活を「貧困」と定義している。

つまり，戦後の貧しかった時代の貧困や，他国の子どもたちと比較したときの貧困ではなく，現代の日本社会においてその生活は通常レベルの一定範囲内なのか，ということを見ていく必要がある。

(2) 日本の相対的貧困率

相対的貧困率は，その国の等価可処分所得（世

[1] ＮＰＯ法人全国こども食堂支援センターむすびえ，「【確定値の発表】全国箇所数調査2021」，https://musubie.org/news/4792/，2022年3月19日取得

帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分に満たない世帯の割合のことであり，さらに子どもの相対的貧困率は18歳未満の子どもの割合のことである。

厚生労働省は3年に1度国民生活基礎調査の大規模調査を実施し，日本の相対的貧困率を発表している。2012年の調査結果では，日本の子どもの貧困率は16.3％となり，実に6人に1人，1クラス35人学級の中に６人の割合で，相対的に見て貧困の状態で暮らしている子どもがいることが分かった。（図２）

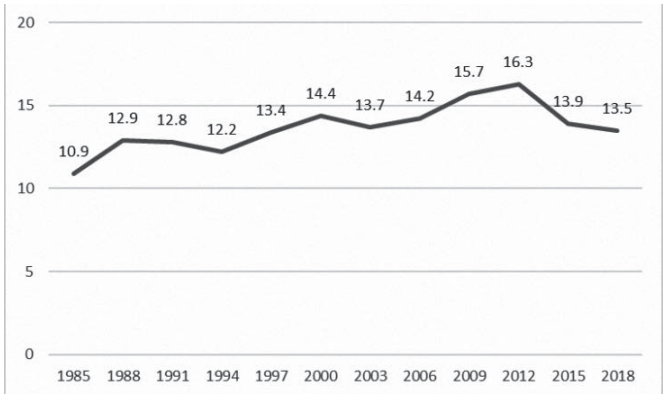

図２　日本の相対的貧困率の推移

厚生労働省資料[2]から作成

日本の子どもの貧困率はOECD加盟国の中でも最も高く，さらに先進７か国（Ｇ７）の中では米国に次いで２番目に高い。
さらにひとり親世帯の貧困率は48.1％（2018年）と，おおよそ２人に１人の割合でひとり親世帯の子どもが貧困の状態である。

(3) 見えにくい子どもの貧困

しかし，子どもの問題は家庭あるいは学校の中に隠れてしまっていることが多く，外からは非常に見えにくい。このことが，なかなか支援が行き届かない要因にもなっている。子どもが自ら手を挙げて「貧しいから助けてくれ」とは当然言わない。「困っている子おいで」と言ったところで，これもまた喜んで来る子どもや家庭は少ないだろう。

人に迷惑を掛けないように，困っていることを知られないようにと，ギリギリのところで何とか１日１日を乗り越えている家庭はたくさんある。

身なりや所持品に気を遣い，食費やそれ以外の出費を削ったり，夏休みと言えどキャンプや旅行に一度も行ったことが無かったり，何かあったときに頼れる人が周りに居なかったり，経済的困窮が日々の生活や子どもたちの成長にもたらす影響はとても大きい。また，そうした生活が普通だと思っている子どもたちは，自分が親になったときに子どもに同じような生活をさせることに違和感を持たない。

また，学力格差という問題が指摘されるように，子どもに十分な教育の機会を作ることが出来ない家庭もある。こうして貧困は連鎖していくのである。

３　市内最初のこども食堂「昭和こども食堂」

(1) 昭和こども食堂を始めた理由

前述のような日本の子どもの貧困問題を何とかしようと立ち上がる大人が増え，こども食堂の動きが広がってきた。栃木県では2015年10月に上三川町に県内最初のこども食堂がオープンした。

宇都宮市内ではその約半年後，2016年５月２日にこれまで子どもたちの学習支援を行ってきた一般社団法人栃木県若年者支援機構が，県庁近くの昭和地区に昭和こども食堂をオープンさせた。

長年多くの子ども，若者と関わってきた団体として，もう少し早い時期，子どものうちにもっと彼らをサポートする環境があれば，と感じることも多かったからである。また，学習支援に通う

2　厚生労働省,「2019年　国民生活基礎調査の概況『II　各種世帯の所得等の状況』」, https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/03.pdf, 2022年３月25日取得

子どもから，「今日はまだ何も食べていない」，「家で一人冷めたご飯を食べている」という話を聞くこともあった。そんな状態で勉強に対する意欲が高まることは難しい。授業を集中して聞く元気も，学校に行く元気もない。まずは子どもたちに温かい手作りの食事を，勉強の話だけでなく，たわいない話も出来る安心できる場所を作ろうと考えたのである。

写真１　昭和こども食堂入り口（移転前）

筆者撮影

(2) 準備からオープンまで

たまたま月曜日の夕方は使っていなかった事務所の２階スペースを飲食店の営業許可申請の為に改装した。同時に工事費用や食器，調理器具の購入など必要な初期費用の為に50万円の寄付キャンペーンを行った。おもちゃや絵本もたくさん届き，準備期間わずか１ヶ月弱で，こどもの日を前にオープンさせることが出来た。

(3) 昭和こども食堂の概要

祝日を除いた毎週月曜日の夕方５時半～７時半に運営をしている。料金は大人500円，子ども300円，未就学児は無料で，玄関に置いてあるチケットとともに入り口で待っているスタッフに渡してもらう。玄関には有料チケットの隣に，支払い免除チケットも置いてあり，利用者はどちらを使っても良い。チケットを選んで，入り口にいるスタッフに渡すだけなので，他の人に免除券を使っていることは知られずに済む。色々聞かれることなく，必要な人が気兼ねなく，ご飯を食べに来られるようにと考え，当初からこのシステムにしている。事前に予約する必要がないのも，予定を事前に立てることが難しい方や急遽こども食堂が必要になった方への配慮である。利用のハードルを出来るだけ低くしたいと考えている。

(4) 利用者の様子

オープン当初は少なかった利用者の数も，こども食堂をインターネットで検索する方が増えたり，利用して下さったお母さんたちが口コミで広めて下さったりしたお陰で，３か月後の夏休み頃には１回20人ほどが利用する賑やかな場所になった。平日の夜の開催ということもあり，子どもとお母さんが一緒に利用することが多い。子どもの年齢は，未就学から小学校低学年の層が多い。

夕方５時半，ボランティアさんたちが作ってくれた料理がテーブルにずらりと並び，時間に合わせて到着した利用者が元気よく入ってくる。４～５品，約20人分の料理を１回３名のボランティアさんたちと一緒に作っている。メニューは，寄付でいただいた食材をもとに決める。季節ごとにたくさんの野菜が支援者の方から届く。ある日のメニューは，レンコンと豚肉のケチャップ炒め，長ネギの卵焼き，大根サラダ，白菜とわかめのお味噌汁，にっこり梨。お肉料理はやはり子どもたちに大人気だ。

ある農家さんは，「子どもが大きくなって，自分でご飯を作るようになった時に，“こども食堂で食べたことがある”と思い出して，スーパーでこの野菜を手に取ってくれるようになったら嬉しい。今は色んな食を体験することが大切」と，いつも無償でたくさんの野菜を提供してくださっている。

一人ひとり並んで，ワンプレートに好きなように盛り付けていく。「野菜も少し食べてみて～」ボランティアさんに声を掛けられ，遠慮がちに少

写真２　昭和こども食堂の様子

筆者撮影

写真３　キッズルームの様子

筆者撮影

しだけお皿に盛る子ども。食べてみると「これ美味しい！！」と今度はたくさんお代わりをしてくれる。

同世代の子が食べているのを見て自分も頑張って食べてみたり，後ろに並んでいる人を見て，取る量を子どもが自分で考えたり，全然知らない人と「この料理美味しいね～！」の一言で一緒に笑い合ったり，『みんなで一緒にご飯を食べること』が，これほどまでにたくさんの良い影響を子どもたちにもたらすことを始める前は想像もしていなかった。きれいに食べ終えたワンプレート皿を自分でキッチンまで運び，ボランティアさんに「ごちそうさまでした」と伝えている。

食後，子どもたちはキッズルームに直行する。寄付で頂いたたくさんのおもちゃがあり，ボランティアのお兄さん，お姉さんたちと一緒に遊んでいる。車に夢中の子がいたり，ブロックで壮大なお家を作る子がいたり，子どもは遊びの天才である。時にはみんなでトランプをしたり，ボランティアさんに絵本を読んでもらったり，こども食堂で仲良くなった年齢の違う子ども同士お話をしたり，終了時間まで思いきり遊んで楽しんでいる。兄弟のいない子や末っ子の子どもも，ここでは自然とお兄ちゃんお姉ちゃんになって，自分より小さい子におもちゃを譲ったり，面倒を見たりしている姿もよく見る。子どもたちは遊びを通して，多くのことを学んでいる。

お母さんたちはゆっくりご飯を食べたり，他の親御さんと情報交換をしたり，普段話す機会の少ない中高生たちと最近の話題で盛り上がったり，リラックスして過ごされている。

「こども食堂に来るようになって，家事に充てていた時間を子どもたちと話す時間に使えるようになった。」「座ってゆっくり食事が出来ることが嬉しい。」そんな声を聞くこともある。こども食堂が決してご飯が食べられない貧しい子どもの為だけの活動ではないことを利用者の方から教えてもらった気がする。

長年通っている子どもは，中学生になると自分で学校帰りに自転車で来るようになったり，友達を連れて一緒に来たり，安心して行ける地域の居場所の一つとして利用を続けている。昭和こども食堂は年齢制限をしていないので，何歳になっても利用することが出来るのである。高校進学後や，社会人になっても，何かあったときはいつでも帰って来られる場所にしたいと考えている。

４　宇都宮市「子どもと子育て家庭等に関する生活実態調査」

(1) 関係性の貧困

宇都宮市では子どもの貧困を経済的貧困と関係性の貧困に分けて捉え，「子どもと子育て家庭等

に関する生活実態調査」を実施した。関係性の貧困とは教育，経験，人とのつながりに恵まれていない状態と示している。

令和２年３月に公表された調査結果によると，宇都宮市の子どもの経済的貧困率が11.9％，つまり８人に１人の割合に対し，関係性の貧困の状態にある子どもは約３人に１人であることが分かった。経済的貧困家庭の子どもが関係性の貧困になりやすいだけでなく，経済的貧困でない家庭の子どもの中にも，関係性の貧困になる子どもが存在するということである。

調査の中で，自分を「駄目な人間だと思うことがある」と答えた子どもは，関係性の貧困にない子どもは52.0％だったのに対し，関係性の貧困にある子どもは63.8％であった。「将来のはっきりした目標を持っている」と答えた子どもは，関係性の貧困にない子どもは65.6％，関係性の貧困にある子どもは52.6％だった。関係性の貧困にある子どもは，自己肯定感が低くなる傾向があることが分かった。

５　食堂から拠点へ

こども食堂を運営しながら，利用者の子どもたちや親御さんと様々な話をする。食事は自然と人の心をほぐす力もあるのだ。夏休み前，あるひとり親家庭のお母さんが「夏休みだけど毎日仕事だし，どこにも連れて行ってあげられない。」とつぶやいたことがあった。子どもたちは夏休みを楽しみにしているとばかり考えていたが，毎日特にすることもなく，下の子の面倒や勉強に明け暮れている子どももいるのだ。

それならば，子どもたちを連れてキャンプに行こうと思い付き，一泊二日のわくわくサマーキャンプを開催した。小中学生15人，申し込みはすぐに満員に達した。ワゴンを借りて益子町の森へ。自然の中で思い切り体を動かし，スイカ割りや流しそうめんなど，夏の定番イベントを実施した。特別なことではなく，通常の生育過程で多くの人が経験することを，自分も「やったことがある」と言える経験の機会を作ることを意識した。

普段こども食堂ではお母さんの傍を離れず静かに食べている子が走り回って遊んでいる姿を見たり，勉強をしに来るときはいつも元気がない中学生が大きな声で笑っている声を聞いたり，食事は人の心を和ませるが，自然体験はそれ以上に子どもたちの心をぐっと開く力があると感じた。子どもたちとの距離も二日間で一気に縮まる。

写真４　わくわくサマーキャンプ

筆者撮影

他にも，大谷にある半田農園様が畑を開放して下さってじゃがいも収穫祭をしたり，子どもたちと一緒にご飯を作るこどもだけ食堂の日を作ったり，事情がありこども食堂まで来ることが難しい子どもたちにこども食堂で作ったお弁当を届けたり，その時その時の利用者のニーズや会話の中のヒントから徐々に活動を広げていった。

そして2018年に新たに開設したのが，全ての子どもたちの食べる・学ぶ・遊ぶ・安心をワンストップで支える子ども支援拠点「キッズハウス・いろどり」である。宇都宮市の空き家バンクの中から紹介していただいた物件を借りて，片付けからボランティアさんにも協力してもらい，クラウドファンディングで約300万円の寄付を集め，市民が作る子どもの家として宇都宮市戸祭に誕生した。

昭和こども食堂はそのまま移転し，毎週月曜日にここで変わらず運営をしている。自由に使える拠点を得たことで，月曜日だけでなく，他の曜日に違う活動を運営することが可能になった。

写真５　キッズハウス・いろどり外観

筆者撮影

こども食堂の時間だけでは，ゆっくり話を聞いてあげられなかった子どもたちの為の居場所づくり，外国にルーツがあり，日本語や日本文化を学ぶことが必要な子どもたちの為の日本語教室など，曜日ごとにプログラムを変えている。そうすることで，多様な子どもたちが，いろどりに来れば今必要なことを応援してもらえる，と感じてもらえる場所を目指している。

現在は月曜日に寺子屋とこども食堂，火曜日に外国にルーツを持つ子どもの日本語教室と習いごと教室，そして水曜日から金曜日までは前述の宇都宮市生活実態調査を機に始まった「宇都宮市親と子どもの居場所事業」を受託し運営している。令和２年度の延べ利用者数は1,996名にのぼる。

６　様々な協力の輪

(1) 活動の財源は寄付

こども食堂を開設することになった当初から，寄付を財源に活動することを目指してきた。それには大きく３つの理由がある。一つは利用する子どもたちに線引きをしないこと。行政が行う事業の中には，生活保護家庭の子どもたち，市内在住の子どもたちに限る，などといった制限がついていることも少なくない。限られた公的資金をピンポイントに必要とする子どもに届けるためには仕方がないことだろう。しかし，生活保護になるギリギリのところで踏ん張っている家庭，在住地に利用できる居場所がないなど，枠にははまらないケースが多くある。また，子どもが友達を連れてきたときに，「あなたはいいけど，あなたは利用できない」と断ることはとても難しい。線引きを子どもに説明するのも心苦しい。利用できるかどうかをこちらが判断するのではなく，利用したい子が誰でも利用できる場所にしたいと考えている。

二つ目に，「参加の力が子どもたちを育む」ということを形にしたいと考えている。何をやっているか分からない場所，ではなく，誰でもお手伝いに来たり，野菜を持ってきたりする開かれた場所であれば，利用する人も入りやすい。近所の方から「こんなものがあるけど使ってもらえる？」と声を掛けていただくこともある。いろんな人が「関わったことがある」「こんなことやっている場所だよ」と知っている場所になり，少しずつ居場所の存在が広まっていくことを願っている。

いろどりを応援してくださっている方々（いろどりサポーター）は，企業よりも個人の方が圧倒的に多い。子どもを想う気持ちがあっても，「どこで何をすればいいか分からなかった」という話をよく聞く。料理を作って下さる人，子どもたちの遊び相手をしてくれる人，家庭菜園で採れ過ぎた野菜をおすそ分けしてくれる人，毎年大掃除を手伝って下さる人，網戸の張り替えを買って出て下さる人，いろんな形で手を差し伸べることが出来るのもサポーターが集まりやすい理由になっている。いろどりはまさに，サポーターの力を寄せ集めて成り立っている市民のつくる子どもの家である。

また，子どもたちにも「あなたを大切に想う温かい大人は社会にこんなにたくさんいる」ということを伝えられる場所になっている。いろどり内の大広間には，いろどりサポーターの名前が書かれた風船がたくさんあり，子どもたちはいつもそれを目にしている。お菓子をいただいたときは「〇〇さんがくれたよ」と伝えるようにもしている。今は分からなくても，大人になったときに「自分はたくさんの人に見守られていたのだな」と，思い返して心が温かくなる瞬間があればいいと願っている。

さらにこれは予想していなかった効果だが，子どもたちは，最初はたくさんの大人が来ることに警戒心が強く，人見知りで自己紹介が出来ない子どもも多かった。しかし，いまでは新しいボランティアさんにも学校のことを話したり，お菓子を持ってきてくれた近所の方に「ありがとう」と子どもたちから直接伝えられたり，人と関わることがとても上手くなっていると感じる。色んな大人に出会う経験が，知らず知らずのうちに出来ていることがとても良い。「大人は信用できない」と話していた子も，「いろどりの大人は違う，大好き」と言ってくれる。

そして三つ目に，持続可能で広がりのある活動にしていくことである。そのために運営に必要な資金をいかに確保していくかは非常に重要な問題である。行政からの委託事業など，外部の大きな資金に依存するのではなく，活動に必要な資金を，会費，寄付，活動収入など自己努力により捻出していくことが大切と考える。苦労は多いが，その努力を続けることで活動の持続性を担保し，さらに子どもたちが今必要としていることに合わせて活動を柔軟に変化させたりすることができる。実際，コロナ禍において各地のこども食堂が，こうした状況でも子どもたちのためにできることを考え，お弁当の配達やテイクアウト，フードパンドリーなど活動形態を変えていったこともこうした自主性や自己財源（それを支える人たちの力）があったからこそといえる。

また，出来る限りお金を掛けずに運営できる工夫を積極的に取り入れることも大切である。お金があるからできる，という活動では広がらない。委託費や補助金がなくても子どもを想う市民が集まり，少しお金があれば運営できる，というモデルをつくることこそが，活動の広がりという点においては大切なことである。

(2) 様々な協力の形

そうした考え方のもと，寄付や物資のご支援，ボランティアの募集を随時行っている。令和２年度の寄付総額は2,598,744円，延べ114の個人・団体・企業様が寄付をして下さっている。野菜やお米，子供服やおもちゃなどの物資を寄贈して下さったのは延べ85の個人・団体・企業様，ボランティア登録者は33名であった。

こども食堂が認知されるようになるとともに，企業から協力のお話をいただく機会も増え，協力の形も幅広くなっている。カルビー株式会社様はＣＳＲ担当の方がこの活動に早くから関心を持って下さり，協賛こども食堂が実現した。季節ごとのイベントを家庭内だけでは経験することが少ない子どもたちも参加できるように，いつもより広い会場を借りて夏祭りこども食堂を開催した。協賛金だけでなく，当日は社員の皆様も実際に来ていただき，運営を手伝ってもらうのだ。

ＪＡうつのみや様は，新型コロナウイルスで全学校が休校になっているときに，毎週昭和こども食堂に苺を届けて下さっていた。現在では直売所で購入した食材のキャッシュバックを行って下さっていたり，月に１回女性会の皆様がこども食堂メニューの提案と実際の調理に携わって下さっている。

また，栃木県ＪＡビル管理組合様では，社員食堂に昭和こども食堂への寄付付きメニューを置い

てくださっている。

その他，「子どもを支える募金箱」を置いてくださっている飲食店さんもある。

写真６　ＪＡうつのみや直売所

筆者撮影

7　おわりに

我々が昭和こども食堂を始めた2016年ごろは，こども食堂という名前が知られていない分，マイナスイメージもなく，開設がしやすかった。しかし，その後報道の影響などにより「こども食堂＝ご飯が食べられない子どもが行く場所」というイメージが定着し，こども食堂という名前を使うことを避ける動きも広がった。こども食堂を5年間，運営してきた私が思うこども食堂は「子どもを囲んで色んな人が集う場所」である。活動の中心には子どもたちがいて，子どもが来やすい雰囲気，空間を意識して作られている場所ではあるが，子どもだけでは成り立たない。子どもたちは親でも先生でもない，色んな大人と出会い，「こんな大人もいるんだ」「そういう考え方もあるんだ」ということを知り，世界を広げる。ボランティアも利用者も，支援する側，される側，という関係性ではない。ボランティアの皆さんにとっても居場所となるように，楽しみながら参加してもらっている。「仕事の息抜きになる，ここに来ると私も元気になるから来ている」と話す方，20代30代の若者は「親になる前に子どもたちと接する機会があって良かった」と話す。

資格や専門的な知識があるわけではない市民が子どもたちに出来ることは，同じ時間を思う存分共有することである。一緒に大声で笑ったり，全力疾走してくれたり，泥だらけになって遊んでくれる大人の存在は子どもたちにとって非常に貴重である。家に帰ったら寂しい思いをするかもしれない，遊ぶことよりも勉強を見てほしいと思う親もいるかもしれない，しかし，私たちに出来ることは，今ここにこの子がいるこの時間，一緒に笑ったり一緒に怒ったり，同じ時間を共有することで，その子が心からの安心を得る手助けをすることなのである。安心感を得て，今の自分を認められた子どもたちが，その後自ら輝きだすその行動力は大人の想像をはるかに超える。子どもは皆，計り知れない可能性を秘めているのである。

貧しいから助けるのではなく，日本で暮らすすべての子どもたちが誰一人見捨てられることなく，社会から大切にされていることを感じながら成長していけることを願っている。

参考文献

阿部彩，2008，『子どもの貧困―日本の不公平を考える』４
宇都宮市，2020，「子どもの貧困対策」及び「子どもの権利の尊重」に関するパンフレット
宇都宮市，2020，第２次「宮っこ　子育ち・子育て応援プラン」25，資料７－８
ＮＰＯ法人全国こども食堂支援センター・むすびえ，2021，こども食堂全国個所数調査
厚生労働省，2019，国民生活基礎調査の概況